

慣用的分詞構文は例外か

時崎 久夫

1 はじめに

次の文は学校文法では慣用的分詞構文と呼ばれ、例外とされている。

- (1) a. Generally speaking, the Japanese are diligent.
- b. Judging from his appearance, he is fairly rich.
- c. Considering her age, she did quite well.

本稿ではこの構文の生産性と共通性から、これらは単なる慣用的な例外ではなく、分詞句が語用論的に主節に関連した構文であることを述べる。

2 学校文法・伝統文法での扱い

ではまず学校文法・伝統文法で分詞構文がどう扱われているかを見よう。基本的な分詞構文(2a)では、(2b)の言い換えに示されるように、分詞句の意味上の主語はTomであり、主節の主語と同一指示であるため明示されない。

- (2) a. Seeing me, Tom waved his hand.
- b. When he_i saw me, Tom_i waved his hand. (安井 1982:152)

これに対し、独立分詞構文と呼ばれる(3a)では分詞句の主語が明示される。

- (3) a. Night coming on, we locked the doors.
- b. As night came on, we locked the doors. (安井 1982:259)

(3b)では従属節の主語nightは、主節の主語weと異なるので(3a)の分詞句でも明示されなければならない。分詞句の意味上の主語が、主節の主語と異なるのに明示されないと、(4a)のように非文法的な文になってしまう。

- (4) a. *Being very interesting, I read the book through at a stretch.
 - b. As the book was very interesting, I read it through at a stretch.
- (江川 1991:347)

(4b)では従属節の主語the book と主節の主語 I が一致していない。(4a)のような分詞は伝統文法では無関連(unrelated/unattached)あるいは懸垂(dangling)と言われ、実際には使われることもあるが、非文法的とされる(Curme(1931), Declerck(1991), Kruisinga(1911), Scheurweghs(1959), Zandvoort(1957)を参照)。

このように分詞構文では「分詞句の意味上の主語が主節の主語と異なる場合には明示されなければならない」という規則があるが、この例外とされるのが(1)の文である。(1)のそれぞれでは、主節の主語 the Japanese, he, she が speaking, judging, considering の意味上の主語であるとは考えられない。そこで学校文法ではこれらを慣用的な構文として扱い、意味上の主語が一般の人を指す we, you, one, they である時は例外的に省略されるとしている¹。

3 慣用的分詞構文の生産性

しかしながらこれらの文を単に慣用的として片付けてしまうことには問題がある。第一にこの構文は慣用的と言うにはあまりにも多くの表現が可能であり、また新たな表現を作り出す生産性を持っている。(1a)の speaking の場合、辞書によれば(5a)に示すような様々な副詞と組み合わせることができ、また⁺印の副詞は(5b)のようにspeakingの後にもくることができる²。

- (5) a. approximately, briefly, broadly⁺, comparatively, frankly⁺, generally⁺, honestly, humanly, legally, metaphorically, objectively, paradoxically, philosophically, plainly, practically, properly⁺, relatively, roughly, seriously, statistically, strictly⁺, technically
(『新編 英和活用大辞典』研究社 1996; 『リーダーズ+プラス』研究社 1996; 『ジーニアス英和辞典』大修館 1995 (各CD-ROM版))
b. Speaking generally, it furthered--and still tends to further--the interests of the Western powers. (Brown Corpus, 以下BCと略)

またCollins Cobuild English Grammar (1990:421-422)も、この他に次の副詞をあげてspeakingが付加されることがあるとし、この構文を生産的だと述べている³。

- (6) aesthetically, basically, biologically, chemically, commercially, culturally, ecologically, economically, emotionally, environmentally, essentially,

ethically, financially, fundamentally, geographically, ideologically,
intellectually, logically, mechanically, mentally, morally, numerically,
outwardly, physically, politically, psychologically, racially, scientifically,
sexually, socially, spiritually, superficially, technologically, ultimately,
visually

さらに他に(7)のような副詞の実例も存在する。(7d)は副詞句の例である⁴。

- (7) a. The show may make big profits, but artistically speaking (=from an artistic point of view) it's terrible.
(Longman Dictionary of Contemporary English 1987, 以下LDと略)
- b. Indeed, mathematically speaking, it was both functionally and symbolically the most important number in the entire diagram.
- c. Ideally speaking, it should be allowed to operate only where the public has a great stake in the continuity of supply or services,
- d. Speaking in terms of sociological stereotype, the “private eye” might appeal to the poet in search of a myth for many reasons. (BC)

また(1b)のjudgingでは(8a)のbyと(8b)のfromが可能である。

- (8) a. There was some great national celebration in town, judging by the firework displays everywhere
- b. Judging from the findings of the research, the animal is immune to many diseases

(Collins COBUILD English Language Dictionary 1987, 以下COと略)

(1c)のconsideringは, (9a)のように後に名詞句がくる場合と(9b)のようにthat節がくる場合がある。

- (9) a. I am firmly convinced that considering the average quality of teachers in this country, the profession is grossly overpaid.
- b. Considering that the current school-age potential is 23 million youths, the project and its message on hunting and shooting education have many more to reach. (BC)

特に(7d)のspeaking in terms of, (8)のjudging by/from, (9)のconsideringの場合は後にくる名詞句と節による表現には無限の可能性があるので、分詞句全体を慣用句と考えることは不可能である。以上のように、単に慣用的だとするにはこの構文の範囲は広すぎるというのが第一の問題点である。

4 慣用的分詞構文の共通性

第一の問題とは逆に、単に慣用的な表現の集まりだとすると、これらの構文が持つ共通の特性を説明できないという、第二の問題がある。つまり、第一の問題が、慣用表現にしては多すぎる、広すぎる、ということだったのに対し、第二の問題は、慣用表現の単なる集まりにしては偏っている、狭すぎるということである。ここでは七つの共通の特性を順に見ていく。

第一に、この構文の分詞は発話、判断、思考、仮定などの一部の動詞に限られている。試みに、strictly speaking, properly speakingのspeakingの代わりに(10a)と(10b)のようにmarkingやdressingを入れても、「厳密に採点すれば」とか、「適切な服装をすれば」という意味では容認されない。

- (10) a. *Strictly marking, most of the students cannot pass the examination.
- b. *Properly dressing, we can admit anyone into the ceremony.

第二に、この構文の分詞は単純形のみであって、完了形の例が見られない。また(1)の例を(11)のように、完了形分詞にすると容認度が下がる⁵。

- (11) a. *Having generally spoken, the Japanese are diligent.
- b. ?Having judged from his appearance, he seems to be fairly rich.
- c. ?Having considered her age, she did quite well.

第三に、他の分詞構文とは異なり、この構文の分詞句には否定表現が含まれない。(12)のように、分詞句に否定のnotを付けた文は容認されない。

- (12) a. *Not strictly speaking, you are right.
- b. *Not judging from his appearance, he is a nice teacher.
- c. *Not considering her proud manner, she is a good girl.
- cf. ... not knowing the host or the character of the party, she had gone. (BC)

第四に，分詞句の位置は比較的自由である。speakingの例から見よう。

- (13) a. Shell people did not, strictly speaking, breathe.
b. Decanting old wine aerates it fully; it may also be practically speaking--a matter of good economy.
c. ...; that on the immediate horizon, if further large-scale (relatively speaking) desegregation comes, it will result from court orders on suits filed in several Middle-South states.
d. The biography of Lord Grey is strictly speaking not a biography at all. (BC)
e. He's not a doctor technically speaking.
(Collins Cobuild English Grammar 1990:421)
f. "I'll leave you in Robyn's capable hands, then, Mr Wilcox. Metaphorically speaking, of course. Ha, ha!" (David Lodge, *Nice Work*:239)

(a)はコンマ，(b)はダッシュ，(c)は括弧，(d)と(e)は無印で，文中や文末に，さらに(f)ではピリオドの後に分詞句が現れている。この挿入句的な性質は judging と considering の場合にも見られる。(14a)ではコンマ，(14b)では括弧が用いられている。

- (14) a. Then came their bathroom, and then a bedroom that, judging by the photographs on the walls, must belong to ~Mme Cestre.
b. ..., which (considering the talent at hand) should probably have been the gathering of fresh samples of the Chicago style. (BC)

第五に，分詞句は条件の意味を表す。他の一般の分詞構文では，時・理由や付帯状況を表す用法があるが，この構文にはない。(15b)と(16b)はそれぞれ時・理由を表す副詞節の例であるが，(15a)と(16a)に示すように同じ意味でこの分詞構文を作ることとは不可能である。

- (15) a. *Considering her age, the doorbell rang.
b. When I was considering her age, the doorbell rang.

- (16) a. *Roughly speaking, the students cannot understand my explanation.
 b. As I speaks roughly, the students cannot understand my explanation.

さらに注意が必要だと思われるのは次の例である。

- (17) a. *Properly speaking, they might welcome me to their house.
 b. If I speak properly, they might welcome me to their house.
 (18) a. *Considering the financial problem, the boss yells at me.
 b. If I consider the financial problem, the boss yells at me.

(17b)と(18b)は、ifで示されるように条件を表す副詞節の例であるが、これらを分詞句にした(17a)と(18a)はそれぞれの(b)文とは同じ意味にはならない。この例は、分詞句は単なる主節に対する条件ではなく、主節の判断・意見を述べる際の条件でなくてはならないということを示している⁶。

第六に、これに関連して、主節が話者の判断、意見を表している場合が多い。このことは(19)の実例で主節に認識的な助動詞やseemという表現が使われていることからわかる((7c), (7d), (13b), (14a), (14b)の例も参照)。

- (19) a. Speaking as a Conservative--the best thing would be to privatize the industry. (CO)
 d. Judging from their appearance, it seemed that the weather outside must be worsening.
 c. Considering the nature of man, and the conditions for happiness, this can hardly be so. (BC)

第七に、文体的には他の分詞構文は文語的な表現であり、書き言葉に多いのに対して、この分詞句は口語的で、上の(13f)のように実際に話し言葉でも使われる。次は会話コーパスからの例で、# は音調群の境界を表す。

- (20) what kind of category# of novel would you say# generally speaking#
 Lord of the Flies belongs to# is it a realistic novel# or is it a symbolic
 novel# or how would you describe it# (London-Lund Corpus)

さて、以上七つの点を見てきたが、こうした共通の特徴は、この構文を慣用表現の集まりだとしてしまうと説明することができなくなってしまう。なぜこうした一定の性質を持つのかを説明することが必要だと思われる。

5 分詞句の主語

この構文に対する従来の考え方にはもう一つの問題がある。第2節で見たように学校文法では、分詞句の意味上の主語が一般の人を表す *we, you, they, one* であるために主節の主語と異なっても慣用的に省略できるとしている。今井他(1989:117)でも(21)に示すように、この分詞句の主語は任意の指示を持つ空の代名詞(*arbitrary PRO*)だとしている。

- (21) a. PRO_{arb} strictly speaking, that's not my car.
b. PRO_{arb} judging from his accent, he appeared to be a Frenchman.

しかしこのように意味上の主語が一般の人を指すので省略できるとするだけでは(22a)と(23a)の非文法性を説明できない。

- (22) a. *Clearly speaking, people can understand you easily.
b. If we speak clearly, people can understand you easily.
(23) a. *Saying "the early birds catch the worm," I make it a rule to get up at six.
b. As they say "the early birds catch the worm," I make it a rule to get up at six.

(22b)と(23b)の副詞節の主語は一般の人を指す *we, they* であるが、省略して(22a) (23a)の分詞句にすることはできない。これは上で述べたように、分詞句が主節を述べる際の条件でなければならないからである。よって意味上の主語が一般の人を指すため省略できるとする従来の説明は当を得ていないと思われる。

6 遂行分析に基づく説明

ここまで、この構文を単に慣用的な例外とすると、生産性と共通性という二つの問題が生じること、さらに分詞句の主語が一般の人を指すため省略できるのではないということを見てきた。これらの問題を解決するためには、

この構文も他の分詞構文と同じく規則に基づいて自由に生産できるが，この構文独自の性質や制限も持つと考えるのが妥当であろう。つまり，この分詞句も，従来言われているように主節に対して関連がないのではなく，何らかの形で主節と関連を持っており，またその場合にのみ許されるものと考えられる。ここではまずRoss(1970)などで提案された遂行分析(Performative Analysis)を出発点として考察していくことにする。

Ross(1970)は(24a)の文は基底構造として(24b)に斜字体で示したような遂行節を持っており，これが遂行削除(Performative Deletion)という変形規則によって削除されて派生すると考えた。

(24) a. Prices slumped.

b. *I* $\left[\begin{array}{l} +V \\ +performative \\ +communication \\ +linguistic \\ +declarative \end{array} \right]$ *you prices slumped* (Ross 1970:224)

(24b)では抽象的な遂行動詞が素性の束として書かれているが，これはSAY, TELLなどの動詞と考えられる。Rossはこの分析の証拠として再帰代名詞などの事実をあげたが，その後の研究では問題点も多く指摘されており，現在ではそれらの事実は統語的にではなく，語用論的に扱うべきだとする考え方が一般的になっている。しかしここでは議論をはっきりとさせるために遂行節を仮定して考えていくことにする。

ではまず(25)を考えてみよう。

(25) a. Frankly, Merlin is a genius.

b. I tell you frankly that Merlin is a genius. (Schreiber 1972:321)

Schreiber(1972)は(25a)に対し，遂行分析に基づいて(25b)の基底構造を仮定し，副詞franklyは遂行節のtellを修飾すると説明している。またRutherford(1970: 113)は，こうした文副詞に加え，ここでの慣用的分詞構文や不定詞に対しても最上位に遂行節を仮定する可能性を示唆している⁷。

しかし，上で見たように，話し手はまず分詞句で以下に述べることにしての前置きを述べ，そしてそのあと主節で自分の意見・判断などを述べると

というのがこの構文の特徴である。したがってここでは，Schreiber や Rutherfordのように文全体の最上位に遂行節を仮定するのではなく，(26)のように主節の前に遂行節 I SAY を仮定する。

- (26) a. PRO_i generally speaking, I_i SAY the Japanese are diligent.
- b. PRO_i judging from his appearance, I_i SAY he is fairly rich.
- c. PRO_i considering her age, I_i SAY she did quite well.

(26)の分詞句を副詞節で言い換えれば次のようになる。

- (27) a. If I speak generally, I SAY the Japanese are diligent.
- b. If I judge from his appearance, I SAY he is fairly rich.
- c. If I consider her age, I SAY she did quite well.

(27)では副詞節の主語と遂行節の主語が同じIとなっている。つまりこの構文でも，他の分詞構文と同じように，分詞句の意味上の主語と主節(ここでは遂行節)の主語が一致しているため，分詞句の主語を明示する必要がないのだと言える。よってこの構文は(26)の構造を持ち，PROは遂行節の主語 I によってコントロールされていると考えられる。すると，これまで主節と関連がなく，慣用的であるとされてきたこの分詞句も，実は慣用によって許される例外ではなく，語用論的に主節に関連しているものと言える⁸。

(26)は，遂行節 I SAY が文全体の前に最上位節として現れていない点で一般の遂行分析と異なるが，これと似た構造を持っているのが(28)である。

- (28) As I indicated, I suggest that you try again. (Fraser et al. 1989:651)

(28)はFraserらが反復遂行(repeat performance)と呼んでいる文で，indicatedを含む副詞節の後に遂行表現のsuggestを主動詞とする主節がきている。Fraserらは(28)の副詞節が，主節に対する枠(frame)を提示していると述べ，その中のindicatedを枠組動詞(framing verb)と呼んでいる。これはちょうど(26)の分詞句が主節に対する「前置き」を提示していて，その後に遂行節に導かれる節がきているのと平行的である。すると，この(26)の構造も，この構文だけの特殊なものではなく，一般性をもつ構造であると考えられる。

さらに、この分析の強い証拠になると思われるのは(26)の構造を明示的に持つ例が実際に存在することである。まず次の例から見てみよう。

- (29) a. Speaking as a non-Jew I believe that its primary contribution is in the realm of future policy. (BC)
b. Speaking as a married woman, I consider it important to provide nursery schools for all children who need them. (CO)

(29)では主節にI believe, I considerという、話者の意見・判断を示す表現が明示的に現れている。これは「(私が) ... として話せば」という意味から、当然とも言えるかもしれない。しかし、さらに次のような例が存在する。

- (30) a. Generally speaking, I think you're right. (LD)
b. I think, strictly speaking, you are wrong there. (CO)
c. How many people, roughly? \ Roughly speaking, I'd say 200. (LD)
(31) a. Judging by what everyone says about him, I'd say he has a good chance of winning. (LD)
b. Judging from the way she was dressed, I should say that she was fairly rich. (『新英和大辞典(第5版)』研究社 1980)
c. And judging from the artistic workmanship of this painting, I can say with complete confidence that it was painted by the hand of van Gogh.

(NHKテレビ英会話 I 1993年 1月 テキスト, 29-30)

ここでは、主節にI think, I'd say, I should say, I can say with ...という遂行節が明示的に現れており、(26)と同じ形になっている。これらの例から、この分詞構文では、主節の前に遂行節があると仮定し、分詞句の意味上の主語が遂行節主語のIであると考えることには十分な根拠があると思われる⁹。

しかしここで次のような反論があるかもしれない。主節の前に遂行節を仮定すると、これまでに見てきた(15a)から(18a)のような非文の例でも、分詞句の意味上の主語と遂行節の主語が同じ I になり、分詞構文が可能になるのではないかという疑問である。つまり、もし(15a)に対して(32)のような構造を許すとすれば、この分詞構文を誤って適格と予測してしまうのである。

(32) PRO_i considering her age, I_i SAY [the doorbell rang].

しかしながら，この(32)はもともと(15a)の意図された意味を正しく示すものではない。(15a)の分詞句considering her ageは，遂行節 I SAY を修飾するのではなく，(15b)の副詞節when I consider her ageと同様に，主節the doorbell rangを修飾するからである。よって(15a)は，(32)ではなく，(33)のように遂行節 I SAY が最上位にあって，文全体を補部にとる構造になっていると言える。

(33) I_i SAY [PRO_i considering her age, the doorbell rang]

(33)では分詞句のPROは遂行節の主語 I を指しており，主節の主語the doorbell と同一にならないため，分詞構文 (15a) は不可能であると正しく予測できる。

さてここで，(26)の構造を仮定すると第3節と第4節で見た問題点や特性はどう説明されるのかを考えてみよう。まず生産性の問題については，特定の分詞句が慣用によって特別に許されているのではなく，明示的な主語を持たない一般的な分詞構文と同様に，この分詞句も主節に(語用論的に)関連づけられているため多様な表現が自由に作れるということになる。

また，この構文の持つ共通性についても，この分析によって説明が可能になる。まず第一に，分詞句を作れる動詞は発話・思考・判断などの動詞に限られていた。これは，上で見たように，この分詞句自身も，主節の内容を伝えるための「前置き」を述べている部分であり，一つの遂行表現になっていると考えることで説明できると思われる。つまり，分詞句も遂行表現なので，その中の動詞は遂行動詞でなければならず，(24b)で示したように，[+performative]の素性を持たなければならないと言えよう。

二つめは，完了形でなく単純形が用いられるということであった。これは，この構文が，分詞句で「ただし書き」を述べた上で，主節の陳述をするという構造なので，ただし書きの部分と主節とは同時に，現在において発話されるはずである。よって主節との時制のずれを表す完了形の分詞は使われないと考えられる。

第三の，肯定形のみであることも，分詞句が遂行表現であるとすれば，発話・遂行という性質上，発話行為・遂行行為自体を否定することはできないと説明できる。

第四，五，六，七の点についても，主節を発話する際の「ただし書き」を

分詞句が述べているとすることから、挿入的な表現で、条件を表し、主節がそれに基づく判断などを示すということ、また口語的であるということが自然に説明できる。

7 結論

本稿では、これまで慣用的で、意味上の主語が一般の人を指すとされていた分詞構文について考察した。そして単に慣用的とするだけでは、この構文の持つ生産性と共通性を説明できないということ、また意味上の主語が一般の人を指すため省略できるのではないということを述べ、遂行分析に基づく説明を試みた。結論としては(26)の構造を考え、分詞句の意味上の主語は主節すなわち遂行節の主語 I であり、分詞句は語用論的に主節に関連していること、よってこの構文も分詞構文の例外ではなく、慣用によって許されるのではないということを述べた。

注

本稿は時崎(1993)に加筆し、多くの修正を加えたものである。この論文のヒントを与えていただいた葛西清蔵先生、インフォーマントとして協力してくれたRobert Kluttz, 芸林民夫, Norvin Richardsの各氏に感謝したい。

¹ このように主語を一般の人とする考えの大もとはCurme(1931:159)ではないかと思われる。Curmeは(i)のように括弧内の言い換えでoneを使っている。

(i) Generally speaking (=if one may speak in a general sense), boys are a nuisance.

² 例文中の下線は筆者による。また出典のない例文はインフォーマント・チェックをしたものである。

³ インフォーマントによれば、(6)にはspeakingを付加するのが困難な副詞(emotionally, mentally, visuallyなど)もあるが、それらも特定の文脈では容認できるとのことである。

⁴ speaking as ... の例もある。(29)を参照。

⁵ (11)で、(b)と(c)が(a)よりも容認度がいくぶん高くなっているのは、judgeとconsiderの場合には、speakと異なり、主節で述べることにについて前もって判断したり、考えたりすることができるからであろう。第6節を参照。

⁶ 安井(1982:260)は「... 主節の内容がどういう条件下において妥当であるかと

いう，一種の『ただし書き』を述べるのに用いる。」と指摘している。

⁷ 遂行節を並置(juxtaposition)あるいは挿入(parenthesis)とする考えについては Mittwoch(1977:180)を参照。

⁸ Jespersen(1940:407)は，“In some cases the participle relates to the *I* implied in *my*, etc.”と述べている。また清水(1984:422)は，“「現在分詞の意味上の主語が「人々一般」(one, we, you, etc.) か「話し手自身」である場合は，その意味上の主語は主文の主語と異なっても慣用上省略される」としている。しかし(15)から(18)で示したように，意味上の主語が話し手自身のIであっても，それだけではこの分詞構文を作ることはできない。分詞句が主節の内容を述べる際の条件でなくてはならない。以下の(32)と(33)の議論を参照。また Quirk et al. (1985:1122) も，“The clause is a style disjunct, in which case the implied subject is the subject of the implied clause of speaking, normally I: ...”と述べており，ここでの分析と基本的に一致する見解を示しているが，具体的な分析や議論はしていない。

⁹ “Putting it shortly, we can say that” (『新編 英和活用大辞典』)や(20)の疑問文でwould you sayも見られるが，これらも基本的にはIと考えられる。

参考文献

- Curme, G. 1931. *Syntax*. Maruzen.
- Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Kaitakusha.
- 江川泰一郎. 1991. 『英文法解説 - 改訂三版 - 』 金子書房.
- Fraser, B., H. Ross, and P. Ulichny. 1989. “Repeat Performances.” *Journal of Pragmatics* 13, 651-656.
- 今井邦彦, 中島平三, 外池滋生, 福地肇, 足立公也. 1989. 『一步すすんだ英文法』 大修館書店.
- Jespersen, O. 1940. *A Modern English Grammar on Historical Principles, Part V*. Ejnar Munksgaard.
- Kruisinga. 1911, 1932⁵. *A Handbook of Present-day English, Part II: English Accidence and Syntax 3*. P. Noordhoff.
- Mittwoch, A. 1977. “How to refer to one’s own words: speech-act modifying adverbials and the performative analysis.” *Journal of Linguistics* 13, 177-189.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.

- Ross, J. 1970. "On Declarative Sentences." In R. Jacobs and P. Rosenbaum, eds.,
Readings in English Transformational Grammar, 222-272. Ginn and Company.
- Rutherford, W. 1970. "Some Observations concerning subordinate clauses in
English." *Language* 46, 97-115.
- Scheurweghs, G. 1959. *Present-Day English Syntax: A Survey of Sentence Patterns*.
Longman.
- Schreiber, P. 1972. "Style Disjuncts and the Performative Analysis." *Linguistic
Inquiry* 3, 321-347.
- 清水周裕. 1984. 『基礎と研究 新英語』数研出版.
- 時崎久夫. 1993. 「慣用的分詞構文再考」『文化と言語』（札幌大学外国語学
部紀要）27, 1-16.
- 安井 稔. 1982. 『英文法総覧』開拓社.
- Zandvoort. 1957, 1975⁷. *A Handbook of English Grammar*. Maruzen.